

□ 書 評 □

「DSA—Digital Subtraction Angiography」

大阪大学教授 小 塚 隆 弘 編集
慶応義塾大学助教授 平 松 京 一

神戸大学教授

河 野 通 雄

日常診療において血管造影を必要とする疾患は少なくないが、従来“最終診断法”として行われることが多かった。それは検査に際して、前処置、後処置をはじめ、手技がやや複雑なこと、造影剤を比較的大量に用いるのでその副作用などの問題もあり、血管造影は侵襲性の高い検査という考え方がその根本にあったからであろう。低侵襲性検査を意図して考案された DSA (Digital Subtraction Angiography) の登場はこのような意味合いから画期的な進歩をもたらしたと言える。

現在 DSA 装置は中小医療機関ま

で普及しているとは言えないが、画像を見る機会は増えており、本書は、初めて本法を学ぶ人達にとっても十分理解できるように配慮され、装置の基本、臨床応用における利点と限界、フィルム・サブトラクションとの対比、造影剤に関する基礎的問題点から、頭頸部、心臓、肺血管、腹部動静脈、骨盤領域、末梢血管における DSA の臨床的評価、更には、computed radiography を用いた DSA の新しい分野にわたって解説されている。編集を担当された大阪大学小塚教授は cardiovascular radiology において、また慶応義塾

大学平松助教授は angiography の領域ではそれぞれ世界的に名の知れた大家であり、分担執筆された筆者もわが国の医学放射線学会で活躍中の気鋭で、しかも従来からの血管造影を経験され、DSA の利点、欠点を十分に理解された方々ばかりである。美しい写真も豊富で、臨床にたずさわる人々にとって、“こんな case ではどうする”といったときに役立つ本と言える。

一方、最近の MRI-Angiography に関する報告も増加してきた。まだまだ本法のような鮮明な画像は得られないにしても、造影剤を使用せずかつ X 線被曝なしに得られる文字通りの非侵襲的手段として発展する可能性があり、DSA と共に注目されるところである。

ともあれ、わが国では DSA に関する最もよくまとめられた書であり、多くの臨床家に一読を薦めたい。

B5 判 296 頁 図 42 写真 423
1987 ￥11,000 ㊦ 300 医学書院 刊